（報告書）

宮古島の飲酒法「オトーリ」に対する宮古島出身者が持つ意識

波名城　翔（琉球大学人文社会学部）

1.研究の背景と目的

「オトーリ」とは、宮古島で行われる飲酒の風習である。

「オトーリ」の方法として、「『おとーり』宮古の飲酒法」[1)]では、標準タイプとして以下のように示されている。

「親がグラスに酒を注ぎ、口上を述べた後、グラスの酒を飲み干す。この後、親はグラスに酒を注いで、そのグラスを一人一人に順序よく差し上げる。会場（酒座）にいる全員が一通り終わったら、親は最後に終わった方から酒を注いで貰う。親はそのグラスを持って、協力に感謝を申し上げるとともに『○○さんにつなぎます』と言ってグラスの酒を飲み干す。以下、宴等が続く限り親を変えて延々と続ける」

「オトーリ」を巡っては、これまでは観光の側面からオトーリが活用[2)]がされて、2014 年に宮古保健所の報告[3)]において、AUDIT 調査の結果、宮古島の男性は「アルコール依存症が疑われる」者が約 3,700 人、女性では約 500 人程度いることが試算された。同報告ではオトーリ頻度が多いほど多量飲酒傾向であることが報告されて以降、医療保健分野ではオトーリ廃止が叫ばれてきた。

また、2019 年に波名城ら[4)]が、宮古島内の多量飲酒群を対象に節酒プログラムを行った結果では、AUDIT スコア全体が改善した一方で「一度の摂取量」には効果が見られず、その背景にはオトーリが深く関係していたと述べている。ただ、参加者の多くが手持ちの酒を減らしてでもオトーリによるコミュニケーションを優先していたことからオトーリの再考を示唆している。

下里[5)]の研究では「島外で生活する宮古島出身者がオトーリ」を通じて仲良くなったという事例が報告され、下里は島外での宮古島出身のネットワークを形成する過程においてオトーリが形成するキーとなることを述べている。

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の発生によって、宮古島では 2020 年 4 月に当時の市長が「オトーリ禁止」を訴える事態になり[6)]、同年 8 月に人口 10 万人当たりの新規陽性者が 444.85 人を記録した結果、集団感染リスクの高いオトーリは見られなくなった。

本研究では宮古島出身者（島内、島外在住者）を対象に意識調査を行い「オトーリ」の機能と在り方について示唆を得ることを目的とした。

1-1　語の定義

宮古諸島の総称を「宮古島」と表記する。また、県外については「本土」と表記する。

2.研究 1

研究 1 では宮古島の酒の歴史及びオトーリ文化の歴史的背景を探ることを目的とした。宮古島の酒の歴史については先行研究等から調査を行った。復帰前後以降については、新聞記事や宮古島出身者に行ったインタビューも含めた。

2-1　研究成果

（1）琉球王国時代

沖縄に蒸留技術が伝わり普及する前は口噛み酒が一般的であった。1477 年に与那国島に漂着した朝鮮済州島の漁民が島伝いに送り届けられた際に宮古島は口噛み酒だけが造られていたことを記している [7)]。

15 世紀頃の琉球王国は、東南アジア諸国や中国、日本、朝鮮などとの貿易で栄えており、シャム国などから「南蛮酒」、「香花酒」などの酒類がもたらされ、蒸留の技術や道具も伝わった。萩尾 [7)]は琉球国内、特に首里城を中心とする首里では泡盛製造の基盤整備が 15 世紀後半から 16 世紀前半にかけて進められたと推測している。

宮古島では 1768 年頃には、焼酎が広く造られ、王府に上納する穀物が足りないほどであった [7)]。そのため、1768 年に首里王府から宮古の在番頭宛に布達された「与世山親方規模帳」では、243 カ条のうち酒に関する制限事項や禁止事項は 30 カ条にのぼった。どうしても必要な際には蔵元に許可申請書を届ける必要があったが、馬艦船や大和船から焼酎を持ってきて販売する沖縄本島の士族が増え取り締まりに支障をきたした。砂川 [8)]は、この頃の酒は「村や御嶽の祭祀行事」、「生年祝」、「誕生祝」、「上納祝」、「新築祝」、「磯人祭」、「快気祝」、「いも初祭」、などの祝いや祈願行事等に用いられており、人頭税制下においても伝統的な祭祀行事を執り行われてきたと述べている。

1857 年には「翁長親方規模帳」が布達された。この規模帳では、酒に関する制限・禁止事項は 12 カ条で冠婚葬祭が注意・禁止事項となっていた。また、首里王府からも「焼酎の諸間切・諸島への持ち込み売買禁止令」（1802 年か 1790・1814・1826 年）が出され宮古島へ商売をしていた沖縄本島の士族も次第に姿を消していった。

1874 年に布達された「富川親方規模帳」では、酒に関する制限・禁止事項は 5 カ条のみで、砂川 [8)]は「徹底した禁止と取締りにあって、これらの祝い事や祭祀・祈願行事・冠婚葬祭にサケを用いなくなったのであろうか」と述べている。

（2）琉球王府解体から戦前まで

1879 年、廃藩置県に伴う琉球処分で琉球王府解体以降、これまで王府が管理していた酒造りが民間で可能となった。沖縄県は 1880 年に全国的に制定された「酒造税則」の適用外となり、代わりに酒造りに対して課せられた「焼酎税」は免許料として 1 軒月額 2 円のみであった [9)]。他府県よりも税金が非常に安かったことから、酒屋がたちま

ち増えていき、1898 年には県下の泡盛製造業者は 760 戸となった。

表 1 に宮古島における酒類の醸造について示した。1894 年から「焼酎」と「甘藷焼酎」の区別がなされていたが、宮古島には泡盛製造者の記載はなく、甘藷焼酎が中心であった。甘藷焼酎の醸造高は 1895 年までは 1,000 石を超えていたが、1898 年には 16.6 石まで落ち込んだ。1902 年から 1904 年にかけて泡盛の製造高が示されている。砂川[8]は、「1903 年は人頭税制が廃止される年であり、記念すべき日を控えて、宮古の人々は持てる米や粟を拠出し、これまで欲しくても作れなかった泡盛を作り、この泡盛を持って人頭税廃止・新税法のスタートを祝ったのかもしれない」と述べている。一方、萩尾[10]は、「突如このような泡盛の生産が増加することは考えにくく、しかも芋焼酎の記載はなくなっている。泡盛が記載されているのは明治 35～37 年の 3 カ年のみで、明治年間には他にない。したがってこの項の『泡盛』はおそらく『甘藷焼酎』の誤記だと考えられる」と述べている。

また、平良市史[11]には、泡盛が宮古で製造されるようになったのは 1924 年であるとの記載があるが、砂川[8]は 1913 年に「泡盛の醸造者が 1 戸いたが、その年で姿を消した」と述べており、宮古島では泡盛がいつ醸造されたかは定かではない。

表 1　宮古島における酒類の醸造高（1890 年～1914 年）

単位：石

年	1890年	1892年	1893年	1894年		1895年		1896年		1898年	
酒類	焼酎	焼酎	焼酎	泡盛	甘藷焼酎	泡盛	甘藷焼酎	泡盛	甘藷焼酎	泡盛	甘藷焼酎
醸造高	1,053.0	1,475.8	1,894.0	0.0	1,871.0	0.0	1,958.0	0.0	1,013.0	0.0	16.6

年	1901年			1902年			1903年		1904年		1905年	
酒類	泡盛	甘藷焼酎	黍焼酎	泡盛	甘藷焼酎	黍焼酎	泡盛	芋焼酎	泡盛	芋焼酎	泡盛	芋焼酎
醸造高	0.0	0.0	2,285.0	410.7	0.0	0.0	1,003.5	0.0	225.0	0.0	0.0	93.9

年	1906年		1907年		1910年		1911年		1912年		1913年	1914年
酒類	泡盛	芋焼酎	泡盛	芋焼酎	泡盛	芋焼酎	泡盛	芋焼酎	泡盛	芋焼酎	泡盛	泡盛
醸造高	0.0	333.8	0.0	315.5	0.0	332.4	0.0	0.0	0.0	0.0	451.0	0.0

出典：砂川玄正[8]、「サケを通して見る宮古の人々」より筆者作成

平良市史[11]によると、宮古島で泡盛が製造されるようになったのは 1924 年の首里の野村安重が工場を設け泡盛の製造販売をしたのが始まりであると記載されている。野村は明治の終わり頃から伝馬船で宮古島に酒を運んで販売していたが、酒がよく売れるため宮古島に移住し酒屋を始めるようになった。野村酒類醸造場の後、泡盛の酒造場は年々増加し 1932 年には 7 軒の酒工場があった。泡盛の醸造高については、1932 年には 2,592 石であったが、1935 年には 3,195 石と増加し 3,000 石台で推移している。（表 2）。

表 2　宮古島の酒類醸造高

	1935年	1936年	1937年	1938年	1939年
数量（石）	3,195	3,015	3,094	3,998	3,547
価格（円）	277,771	260,272	279,360	316,140	441,268

平良市史[11]より筆者作成

(3)戦時統制下から復帰まで

1937 年に日中戦争が始まり、4 年後に太平洋戦争に突入すると経済統制が行われ、泡盛も軍需品の供出として割り当てられた。また、政府は酒の需給のバランスを取るために各県に 1 つの会社をつくり、沖縄県では 1941 年に酒造所および小売業者は「沖縄県酒類販売会社」のもとに組み込まれ、酒は販売会社の出すキップで売買されるようになった。

沖縄戦後、ニミッツ布告により軍政府の許可なしに酒類を醸造・販売することが禁止されたが、人々は酒に対する渇望を捨てきれずに各地で密造が盛んに行われ[12]、宮古島でも酒が足りずにザラメ・サツマイモ・サトウキビの汁から密造酒が作られた。毎日の食事も事欠くほど主食は不足しがちであったが、わずかな酒を得るため、その貴重な主食を酒の原料にした。家が貧しい者は、軍隊用の「メチル・アルコール」を用いたが毒性が強く、飲んで眼病に侵される者も出たほどであった[13]。

このような状況の中で、沖縄諮詢会協議会と軍政府との協議の末、廃物を利用することを条件に 1946 年にアメリカ民政府より酒類の製造と民間への配給の指令が出された。県内の 5 つの酒造工場が製造・配給していたが、人々の要求を満たすには足りず、密造は絶えなかった。また、宮古島では、お盆や彼岸などの祭事で酒が必要なことから酒の一般配給が行われ、各戸平均 6 合が割り当てられたが、需要が高く密造が絶えなかった。1946 年の「宮古タイムス」によると、宮古地区では、久松、鏡原、西辺の 3 地区で 36 件が検挙された[14]。

1948 年 10 月 25 日の軍政府指令において酒造業が沖縄民政府の専売事業から代行機関として個人企業に移管されることが明記された。1949 年には酒税法が制定、酒造の民政化が許可され、宮古島では 63 名が製造許可の免許を交付された。平良市史[13]には「戦後の混乱期を過ぎた後、宮古島でも次から次へと酒造工場が建つようになり今ではあり余るほどに生産されている」と当時の記録が見られる。

宮古島では酒が多く作られたが、沖縄民政府が宮古島の酒輸入を承認しなかったため輸出ができなかった。その理由として、低廉な宮古島の酒が輸入されると沖縄の酒造会社が太刀打ちできないこと、宮古島は行政上別の政府であったため宮古島の酒輸入により税収入に欠陥が生じるということであった[12]。1950 年 5 月 6 日付宮古タイムス[14]では「酒税業自然淘汰」を見出しとして、廃業申請が 18 軒に上り、理由として酒造

業者が乱立競争したことにより、酒の値段が低廉化し経営困難に陥ったことが掲載されている。

宮古島内の酒造業者は対策を協議し、宮古民政府に陳情を行い軍政府へ働きかけた結果、1950 年 7 月 3 日付で宮古民政府の主張が認められ、軍政府から列島間の酒移出規定が交付され同年 9 月 1 日から実施された。

（4）本土復帰から現在

1972 年日本復帰にあたり沖縄県復帰特別措置では、酒税や原料米の負担が軽減されることとなった。しかし、1972 年 5 月 19 日付の沖縄タイムスの記事では、「”さがるべき”も値上げ」[15]という記事で復帰直前直後に泡盛は 20%値上がりしていることを報じている。復帰当時の物価上昇について、谷[16]の沖縄県民へのインタビュー録では、「復帰前と後ではずいぶん社会が変わりました。物価がものすごく高くなりました。食堂で飯が食えんようになったんですから、自分の小遣いじゃ。（省略）一年もせんうちに二段くらい上がってましたね」と記されており、物価の著しい上昇があったことが予想される。

復帰前後の宮古島における泡盛に関して、宮古毎日新聞の記事では飲酒運転の記事が散見される。1972 年までは大人の飲酒問題が記事としてあげられているが、1973 年には未成年飲酒の記事が掲載されており、泡盛が一般的に手に入りやすい状況にあったことが推定される。1973 年 12 月には飲酒運転が「交通三悪」として取り上げられ、宮古島では飲酒が社会問題として取り上げられている。

1970 年以降の新聞記事上で「オトーリ」という言葉が初めて使用されたのは 1975 年 3 月 16 日付の宮古毎日新聞で「下地町で 20 代 3 人がオトーリ後に飲酒運転し畑に転落」という記事である。同年 7 月 1 日付では「平良市内でオトーリの回し方が悪いと刺傷事件」など「オトーリ」が宮古島の飲酒のキーワードとなり、1975 年 12 月 19 日上野村では酒の不祥事が多いことを背景に村全体で「オトーリ廃止運動」が総決起された。この時期について宮古島出身者へのインタビューでは、

「復帰当時は混乱期で物価は高かった。その後、公共事業などが入り景気がよくなった。そのあとで泡盛ブームが来て、オトーリが流行りだした。当時は灰皿、くつ、ヘルメットなど何にでも入れて飲まされた」（60 代男性：宮古島在住者）

と景気の上昇と泡盛ブームによってオトーリブームが始まったと述べている。

飲酒運転や飲酒運転絡みの交通事故を背景に 1979 年に宮古地区普及事業連絡協議会、1983 年には上野村議会においてオトーリ廃止が決議されたがオトーリは続けられた。1990 年以降になると「節度あるオトーリを」（沖縄タイムス 1997/5/11）、「オトーリ慣習女子高生まで」（沖縄タイムス 1997/5/20）、「事故多発に危機感」（沖縄タイムス 1998/1/17）、「路上寝、飲酒運転根絶へ 社交飲食業組合が宣言」（宮古毎日新聞 2010/9/26）といったオトーリに関する社会問題が掲載される一方で、「＜沖縄サミット始動＞超党

派スクラム　新鮮だった沖縄の議員団結“オトーリ”で勢い」（琉球新報 1997/5/1）、「宮古観光振興に感謝 東京関係者 199 人招き『オトーリ』」（琉球新報 2006/3/3）といった記事が掲載されるようになった。この時期ついてインタビューでは、

*「昔は小さい盃があって御嶽の行事があるときに集まって皆で飲んだ。贅沢になると無理やりに飲まされた。喧嘩したり、車の事故を起こしたりして、議会でもオトーリ禁止にしようと上がったが、商売的にはオトーリはいいので、適当に飲めない人には飲めるだけという風になった。20 年前に酒屋がオトーリグラスを作って居酒屋に配っていた。」（80 代男性：宮古島在住）*と述べている。

しかし、2020 年 1 月に初めて感染が確認された新型コロナウイルス感染症(COVID-19)によって大きく事情が変わった。「新型コロナ 「オトーリ」禁止　宮古島市長訴え」（琉球新報 2020/4/8）として当時の市長がオトーリ禁止を訴えた。同年 8 月には人口 10 万人当たりの新規陽性者が 444.85 人を記録し、10 月には「『オトーリ』に注意 県、宮古島市に注意報」（沖縄タイムス 2020/10/15）として県の公保健衛生統括から地域を限定した注意報が出すまでに至ったことなどから、集団感染リスクの高いオトーリは減少している。

2-2 宮古島におけるオトーリの起源

「オトーリ」がキーワードとして新聞記事に掲載されたのは 1975 年頃であるが、起源についてはさまざまな説があるためいくつか示したい。

萩尾 [12]は、オトーリは琉球王国時代の首里城の正月儀礼にも類似した酒宴の作法があり、「御通り」または「大通り」と称していたとして、宮古の酒宴での「オトーリ」の呼称とも相通じる用法であると述べている。

次に、オトーリに関する唯一の出版物である「おとーり-宮古の飲酒法-」[1]では、「1368 年、与那覇勢頭豊見親が沖縄本島に向けて白川浜から出帆するのに先立って、広瀬御嶽において航海の安全と大願成就を祈願し、神々に捧げた神酒を一族で回し飲みしたのがオトーリの始まり」と記載されている。同資料によると、「宮古の神事の儀式は、祈願、奉納、語らいで構成されている。（省略）語らいは、神（仏）様に奉納した供え物を飲食することによって、神と人との一体感を共有するとともに、共同体意識の確認等を行うことになっているという。（省略）語らいの場では長老等の挨拶（あるいは神歌）に続いて、酒をツヌザラ（図 1）等に入れて参加者全員（飲む人は主に男性）に均等にふるまい、神との一体感を共有することになるという。」こうして神事に参加した人に順序良く注いで回して飲む行為そのものが『ウートゥイ（現在のオトーリ）』と呼ばれた」と述べている。図 2 のバタスからツヌザラに入れてふるまったと思われる。また、「時代の進展とともに神事の世界から庶民の世界へと移行するとともに酒器の形、酒の量、呑む回数、スタイルが変遷しており、現在のオトーリのスタイルになったの

は、酒が自由に入手することが出来た 1960 年代頃である」と記されている。

また、宮古島市史第 1 巻通史編では [17]、「オトーリは復帰前後に始まった、ごく最近の飲み方であって古くはない」と述べている。

仲宗根 [18]は「オトーリは本来、神事の際に神歌を歌って参加者が神酒を回して飲む儀式であり、それが島内に酒造所が立ち並ぶようになった戦前、新築や出産祝いなどの場でトーガニ（古謡）のメロディーに即興の歌詞を乗せて泡盛を振る舞う形に発展。金銭的に自由に泡盛が買えるようになった 1950 年代後半からは『コミュニケーション』手段の一つとして、現在の形へと変容してきた」と述べている。

図 1 ツヌザラ（宮古島市総合博物館所蔵）

図 2 バタス（宮古島市総合博物館所蔵）

3.研究 2

宮古島出身者がどのような目的でオトーリを行っていたのかを把握するためにインタビューを行った。インタビューに関して宮古島外で生活する者については沖縄宮古郷友会連合会、関東宮古郷友会連合会、関西在住宮古出身者、九州宮古郷友会、その他関係者等を通じて連絡を受けた方を対象とした。倫理的配慮事項として、調査対象者に対して調査目的、内容、公表の可能性、協力は任意であること、いつでも辞退できることについて説明を行った。

3-1　研究成果

インタビュー協力者を表 3 に示した。関東、関西、九州、沖縄本島、宮古島在住者の合計 62 名に協力頂いた。宮古島を出てからのオトーリについてインタビューを実施した。インタビューの実施については個人またはグループインタビューを実施した。

表 3 インタビュー協力者

居住地	年代	人数
関東	30代～60代	11
関西	30代、40代	4
九州	30代～60代	9
沖縄本島	20代、40代、60代～70代	12
宮古島	30代～80代	26

年代によってオトーリの目的の違いが見られた。代表的なインタビューを記述すると、70 代では以下のように述べている。

「中学校で宮古島から出てきた。当時、宮古の人は沖縄本島から差別されていて、仕事もない、家も貸してくれない、バッグ一つで野宿するしかなかった。その時に宮古の人たちで集まってオトーリをしていた。」(70 代男性：沖縄本島在住)

次に 60 代では以下のように述べている。

「中学校卒業して関東に来たときは、沖縄人が差別されていて、居酒屋には『沖縄人お断り』と書いてあった。部屋を借りようとしても沖縄人には貸してくれない。あの当時はそれが当たり前だった。仕方ないと思うだけだった。宮古の人で集まってオトーリした」(60 代男性：関東在住)

「本土にいったときにもオトーリはよくやった。宮古島の人だけで。お互いに状況を確認しながら飲んでいた。虐げられていた鬱憤晴らしという意味もあった。」(60 代男性：宮古島在住)

といった本土や沖縄本島から宮古島出身者が差別されており、仲間同士で集まりオトーリをしていた。

80 代へのインタビューではオトーリの語りは出なかったが、以下のように述べている。

「高校卒業して本土にいったときには、本土の人が寮まで喧嘩売りに来ていた。また、高校卒業しているのに、小学生の本を持ってきて『この本は読めるか？』と言った人もいて・・・そんな時代だった」(80 代男性：宮古島在住)、「バブルの時代は単純労働者を沖縄に求めていて・・宮古にも仕事はないし。本土に働きに行くとバカにされた」(80 代男性：宮古島在住)

と 60 代以上の世代では沖縄県、宮古島出身者への差別があったと考えられる。

次に 50 代では以下のように述べている。

「中学校卒業して本土に来て、先輩たちが面倒見てくれた。迎えに来てくれた先輩たちと飲むときは『オトーリ回せ』と言われて飲んでいた。本土の人とはしていなかった。同じ仲間という意味合いで飲んでいた」(50 代男性：関東在住)

と宮古島出身の先輩や仲間との結束が見られた。

40 代では以下のように述べている。

「宮古島出身者関係なくやっていた。昔は、宮古を離れて大阪に来る際には、連絡があって大阪に住んでいる宮古の人達が面倒見ていた。定期的に宮古の人がやっている居酒屋に皆で集まってオトーリしていた。SNS の普及で、大阪に住む前に大阪に住んでいる人たちと友達になって、俺たちと繋がらなくてもいいような形になって・・若い世代と繋がらなくなった」（40 代男性：関西在住）

「大学生の時にオトーリを本土の人に教えんたんだよね。自分が寂しかったんやね。ここに居るメンバーに自分の飲み方を放り込んでやろう、と。親役と子役がコミュニケーションをとって、全員この場のメンバーは仲間になれる」(40 代男性:九州在住）

「沖縄本島で大学生だった頃、友達から『オトーリ経験してみたい』と言われてやったことがある。北海道から九州までいろんな出身者がいた」（40 代女性：関東在住）

30 代では以下のように述べている。

「その普通に当たり前かもしれないけど、やっぱ一人一人がつながる口実に絶対なる。挨拶もあるので、同じ宮古島の人たち、県外の人がいたとしても、一緒に飲むってなれば、初対面の人でも必ず自己紹介して挨拶する。それはもう僕は素晴らしいと思う。」（30 代男性：九州在住）、

20 代では以下のように述べている。

「大学の部活のメンバーが『オトーリやってみたい』といったので 2、3 回ぐらいやった。大人数で集まらないとできないので・・・コロナ禍で大人数集まる飲み会ができなかったけど、飲み会のコミュニケーションツールになったり、親の挨拶が聞けるのがよかった。」（20 代男性：沖縄本島在住）

というように同郷者との連帯感や結束を高める以外に、宮古島出身者以外とオトーリを行うことでネットワークの構築をしていたと考えれる。

4.研究 3　オトーリに関する意識調査

宮古島出身者のオトーリの意識について明らかにするために「オトーリに関する意識調査」を実施した。

4-1　研究方法

回答期限は 2022 年 12 月 7 日から 2023 年 2 月 15 日までとした。沖縄宮古郷友会連合会、関東宮古郷友会連合会、関西在住宮古出身者、九州宮古郷友会、その他関係者等を通じて連絡を行い、ウェブ及び紙媒体にて回答して頂いた。倫理的配慮事項として、調査対象者に対して調査目的、内容、公表の可能性、協力は任意であること、いつでも辞退できることについて記載した。

質問項目①現在の居住地、②性別、③年代、④オトーリの有無と経験した年代、⑤コ

ロナ禍以前のオトーリの有無、⑥コロナ禍以前にオトーリを「していた」または「していなかった理由」、⑦飲み会におけるオトーリの頻度(「していた」と回答した者のみ)、⑧オトーリをしていたメンバー(「していた」と回答した者のみ)、⑨コロナ禍におけるオトーリの有無、⑩コロナ禍にオトーリを「している」または「していない」理由、⑪オトーリの良い点、⑫オトーリの悪い点、⑬宮古島出身者にとってのオトーリの意味、とした。

選択回答項目についてはデータを基に SPSS にて集計を行った。記述項目については、計量テキスト分析を行った。計量テキスト分析について樋口[19]は、コード化作業をコンピュータによって自動化することで、大量のデータであってもコード化の基準に揺らぎや恣意性が生じないことに利点があると述べており、樋口が開発した KH Coder 3 を用い分析を行った。KH Coder 使用時における分析手順として、まず、テキストデータから語へ分解した。次に、分解された最小単位は機械的に分解されるものであるため(例:「泡盛」が「泡」と「盛」に分解される等)、筆者が語の確認を行ない、研究目的に合致した語になるように修正を行なった。この作業は結果を恣意的に操作するような修正を行なわないように十分に注意して実施した。その後分解された頻出語から共起ネットワーク分析を行い、カテゴリ表を作成した。

(1) 回答者の属性

図 3 に回答者の現在の居住地について示した。回答者は 327 人で、居住地別では「宮古島」が最も多く 172 人、次いで「沖縄本島」が 80 人、「関東」が 43 人と続いた。宮古島在住者と宮古島外在住者の割合は 53%と 47%であった。次に性別では、男性が 210 人(64%)、女性が 109 人(33%)、未記入が 8 人(2%)であった。次に年代では、最も多い年代は 40 代で 120 人(37%)、次いで 30 代で 92 人(28%)、50 代が 36 人(11%)と続いた(図 4)。

図 3　現在の居住地

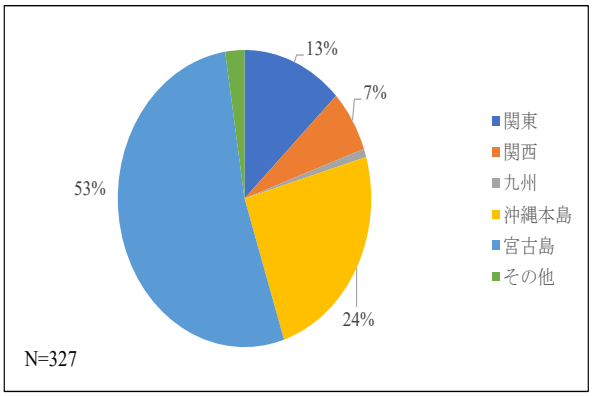
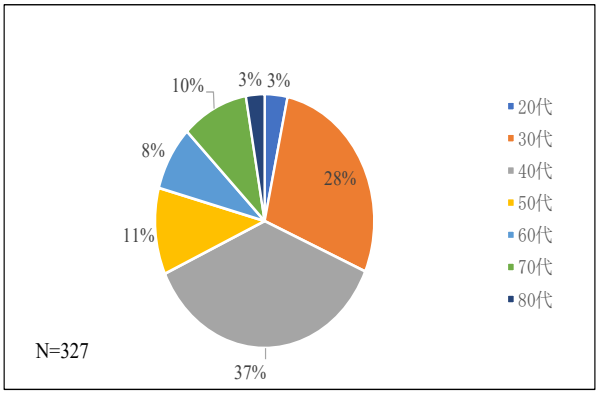


図 4　年代



（2）オトーリの経験の有無と経験した年代

327 人中オトーリ経験が「有」は 315 人であった。年代によって回答総数のバラツキがあるが 40 代以下の世代は 40 代以上の世代と比較し「有」と答えた数が多かった（表 4)。次にオトーリを経験した年代では 20 代が多く、次いで 10 代、30 代であった（表 5)。年代別では 40 代の経験した年代は 10 代での経験が最も多く、他の世代では 20 代が最も多かった。

表 4　オトーリ経験の有無

年代	有	無	合計
80代	9	0	9
70代	28	4	32
60代	24	3	27
50代	35	1	36
40代	116	4	120
30代	92	0	92
20代	11	0	11
合計	315	12	327

表 5　オトーリを経験した年代

		オトーリを経験した年代								合計
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	未記入	
年代	80代	0	3	1	1	1	0	0	3	9
	70代	3	8	7	4	2	0	1	3	28
	60代	2	13	2	1	2	1	0	3	24
	50代	10	17	4	3	1	0	0	0	35
	40代	53	51	7	3	0	0	0	2	116
	30代	37	48	7	0	0	0	0	0	92
	20代	2	9	0	0	0	0	0	0	11
合計		107	149	28	12	6	1	1	11	315

(3)コロナ以前のオトーリについて

コロナ流行以前のオトーリの有無について、「していた」と回答したのは 252 人（77.1%)、「していなかった」が 72 人（22.0%)、「未記入」が 3 人（0.9%）であった。次に、飲み会におけるオトーリの頻度を表 6 に示した。「大体毎回」が最も多く 119 人（44.1%)、30 代以上の世代では割合が最も高かった。次にオトーリをするメンバーについて表 7 に示した。全体では「宮古島出身者のときだけ」が最も多く 150 人（56.2%）であった。年代別でも全ての世代で「宮古島出身者のときだけ」と回答した割合が最も高かった。

表 6　飲み会におけるオトーリの頻度

	全体	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
大体毎回	119(44.1%)	1(12.5%)	30(35.3%)	46(47.4%)	15(50.0%)	11(57.9%)	12(48.0%)	4(66.6%)
ときどき	58(21.5%)	2(25.0%)	26(30.6%)	17(17.5%)	5(16.7%)	0(0.0%)	7(28.0%)	1(16.7%)
たまに	61(22.5%)	2(25.0%)	20(23.5%)	23(23.6%)	7(23.3%)	3(15.8%)	5(20.0%)	1(16.7%)
ほとんどしない	32(11.9%)	3(37.5%)	9(10.6%)	11(11.3%)	3(11.0%)	5(26.3%)	1(4.0%)	0(0.0%)
合計	270	8	85	97	30	19	25	6

表 7　オトーリをするメンバー

	全体	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
宮古島出身者だけのとき	150(56.2%)	6(75.0%)	42(49.4%)	59(61.5%)	16(55.2%)	10(55.6%)	13(52.0%)	4(66.7%)
出身地関係なく	113(42.3%)	2(25.0%)	41(48.2%)	36(37.5%)	13(44.8%)	7(38.9%)	12(48.0%)	2(33.3%)
その他	4(1.5%)	0(0.0%)	2(2.4%)	1(1.0%)	0(0.0%)	1(5.5)	0(0.0%)	0(0.0%)
合計	267	8	85	96	29	18	25	6

次に「オトーリをしていた理由」の記述について計量テキスト分析を行った。総抽出語数は 1,949 語で、その中で異なり語数（飲み会、模合等など）は 393 語であった。出現回数が最も多い語は「飲み会」で 32 回、続いて「飲む」が 31 回、「普通」が 30 回と続いた。

次に、出現回数が 5 回以上の語からネットワーク分析を行い、分析結果を図 5 に示した。共起ネットワーク分析により、語は 6 つのカテゴリに分類された。円の大きさは言葉の頻度の多さを示し，線の上の係数は Jaccard 係数で語と語の関連性の強さを示している。共起したカテゴリに名称を付け、コード数、共起した語、含まれる代表的記述を示したカテゴリ表を表 8 に示した。

最もコード数が多いのは「宮古島出身者が集まったら自然とオトーリをする」でコード数は 150 であった。次いで、「楽しく飲むためのコミュニケーションツール」（コード数 48)、「宮古島の風習」（コード数 41）であった。また、「職場の付き合い」（コード数 14）というのもあった。

図 5　「オトーリをしていた理由」の共起ネットワーク

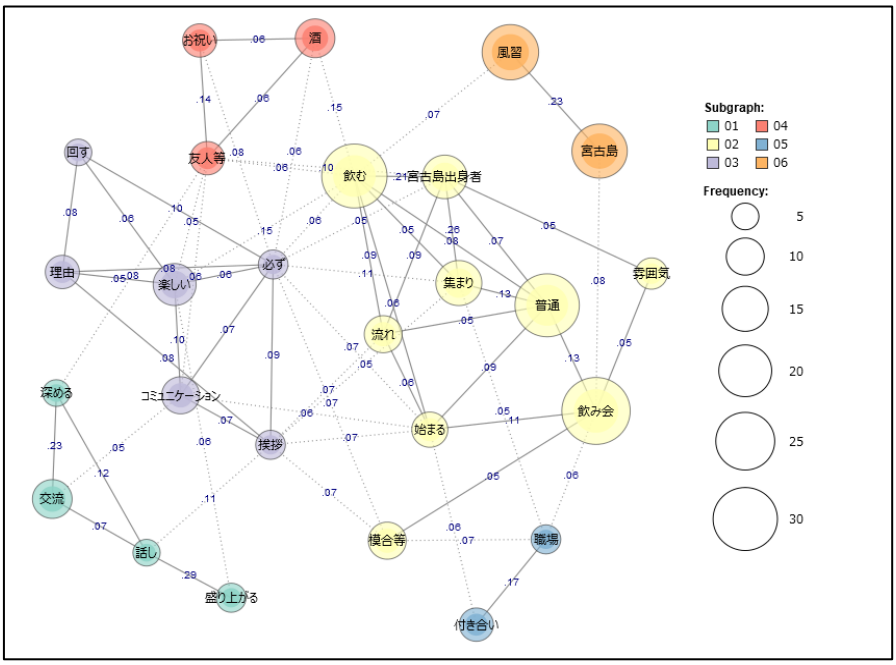


表 8　「オトーリをしていた理由」のカテゴリ表

カテゴリ名称	コード数	共起した語	代表的記述（抜粋）
宮古島出身者が集まったら自然とオトーリをする	150	飲み会、飲む、宮古島出身者、普通、始まる、集まり、流れ、雰囲気、模合等	模合等のメンバーが揃えばそれが当たり前に普通の飲み方だった 宮古島出身者で集まる機会があるから 宮古島出身者で飲む際は、のりでやる流れがあった
楽しく飲むためのコミュニケーションツール	48	楽しい、コミュニケーション、必ず、挨拶、理由、回す	コミュニケーションといって仲間の一人がするとついしてしまう それぞれが言いたいこと、口上を述べ、コミュニケーションが取れるから
宮古島の風習	41	宮古島、風習	宮古島の風習だから 風習の継承
お祝いや友人等の集まり	27	お祝い、友人等、酒	お祝い事や親族や友人等の集まりでは当たり前にオトーリをする環境にいました お祝い事や久しぶりにあった友人等たちと集まったとき
親睦や話が盛り上がる	21	盛り上がる、深める、交流、話し	一人一人と話ができ、より親睦を深めることができる 話が盛り上がるから
職場の付き合い	14	職場、付き合い	職場の付き合い 会社の付き合い

次に「オトーリをしていなかった理由」の記述について計量テキスト分析を行った。回答数が少ないため出現回数 2 回以上の語を分析対象とした。共起ネットワーク分析を行い、共起したカ

テゴリに名称を付け、コード数、共起した語、含まれる代表的記述を示したカテゴリ表を示した（表 9）。最もコード数が多かったのは「機会がなくなった」でコード数は 19 であった。次いで「酒が弱い」（コード数 6）と続いた。

表 9　オトーリをしていなかった理由

カテゴリ名称	コード数	共起した語	代表的記述（抜粋）
機会がなくなった	19	機会、地元、人、出産、泡盛、若い、同窓会	沖縄本島に引っ越ししたことや、結婚、出産で地元の人と飲む機会がなくなった 泡盛を好む人が少なくなり、それぞれが好きなアルコール飲料を飲むようになった 若い頃は同窓会をするとオトーリをしていたが、年を重ねると同窓会も女性だけになりオトーリはしなくなった
酒が弱い	6	酒、弱い	オトーリは1度しかしたことがなく、その際に酒に弱いことに気づいたため
自分のペースで飲みたい	4	自分、ペース	自分のペースで飲みたいから

(4)コロナ感染症以降のオトーリについて

表 10 に現在のオトーリの有無について示した。「している」と回答したのは全体の 14.5%で、84.0%が「していない」と回答した。

表 10　現在のオトーリの有無

	度数	パーセント
している	47	14.5
していない	273	84.0
未記入	5	1.5
合計	325	100.0

次に「オトーリをしている理由」の記述の分析を行った。回答数が少ないため出現回数 2 回以上の語を分析対象とし、共起ネットワーク分析を行い、共起したカテゴリに名称を付け、コード数、共起した語、含まれる代表的記述を示したカテゴリ表を表 11 に示した。

最もコード数が多かったのは「オトーリのスタイルを変えた」でコード数は 21 であった。次いで「風習の本質」（コード数 7)、「気にしない」（コード数 6）であった。

表 11　オトーリをしている理由

カテゴリ名称	コード数	共起した語	代表的記述（抜粋）
オトーリのスタイルを変えた	21	飲む、変わる、コップ、回す、スタイル	オトーリのスタイルも変わり一つのコップを回すのではなく　各自のコップに親が注いで飲むスタイルに変わった コロナ以前とは形式が変わり、グラスで回し飲みではなく乾杯にかわった
風習の本質	7	風習、交わす、本質	風習は受け継ぐものだし、酒を一気するという事が本質ではなく、祝い酒を交わし、祝辞を交わす事が本質と考えるから
気にしない	6	コロナ、人、気にしない	そもそも人が集まっての宴会の場合、オトーリ関係なくコロナになる時はなると思う

次に、「オトーリをしていない理由」について計量テキスト分析結果を示した。総抽出語数は 1,916 語で、その中で異なり語数は 383 語であった。出現回数が最も多い語は「コロナ」で 81 回、続いて「感染」が 38 回、「飲み会」が 34 回と続いた。出現回数が 5 回以上の語からネットワーク分析を行い図 6 に結果を示した。共起ネットワーク分析により、語は 5 つのカテゴリに分類された（表 12）。

最もコード数が多かったのは「コロナ感染予防」でコード数は 162 であった。次いで「集まって酒を飲む機会がない」（コード数 88）、「飲酒の機会の減少、飲み会へ参加していない」（コード数 62）と続いた。

図 6　「オトーリをしていない理由」の共起ネットワーク図

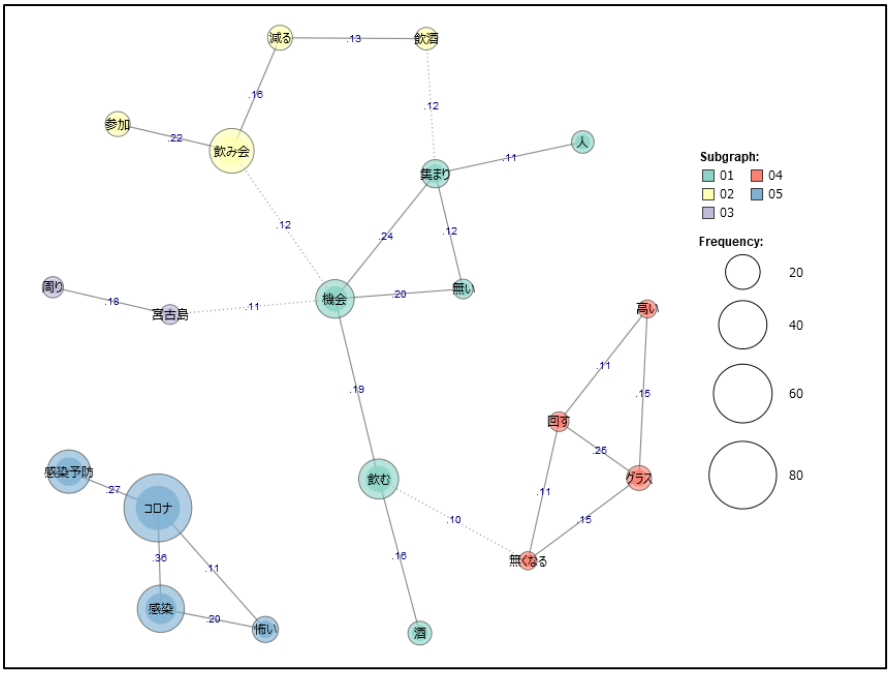


表 12　「オトーリをしていない理由」のカテゴリ表

カテゴリ名称	コード数	共起した語	代表的記述（抜粋）
コロナ感染予防	162	コロナ、感染予防、感染、怖い	コロナ感染の可能性が高くなるから コロナ感染が怖いから
集まって酒を飲む機会がない	88	飲む、機会、集まり、酒、無い、人	集まる機会がない（コロナで安易に飲み会ができない） 飲み会減少
飲酒の機会の減少、飲み会へ参加していない	62	飲み会、参加、減る、飲酒	飲み会に参加していない 飲酒やめたから
グラスを回さなくなった	26	グラス、回す、高い、無くなる	一つのグラスを回すのが無くなった。 飲み会に行く事態感染率が高いのに1つのグラスで回し飲みは絶対しない
周りに宮古出身者がいない	15	宮古島、周り	コロナ流行以降、宮古島を離れ関東に移り住んだ。周りに宮古島出身者はおらず集まって飲酒をするという機会がないためオトーリは出来ていない

（5）オトーリについて

「オトーリの良いところ」の記述の計量テキスト分析結果を示した。総抽出語数は 2,865 語で、その中で異なり語数は 551 語であった。出現回数が最も多い語は「人」で 55 回、続いて「話す」が 48 回、「挨拶」が 41 回と続いた。次に、出現数 5 回以上の単語から共起ネットワーク分析を行い、分析結果を図 7 に示した。共起ネットワーク分析により、語は 9 つのカテゴリに分類された。共起したカテゴリに名称を付け、コード数、共起した語、含まれる代表的記述を示したカテゴリ表を表 13 に示した。最もコード数が多かったのは「初対面でも話して仲良くなれる」でコード数は 214。次いで「人前で挨拶をする経験がつく」（コード数 56）、「全員と会話ができる」（コード数 50）と続いた。

図 7　「オトーリの良いところ」の共起ネットワーク図

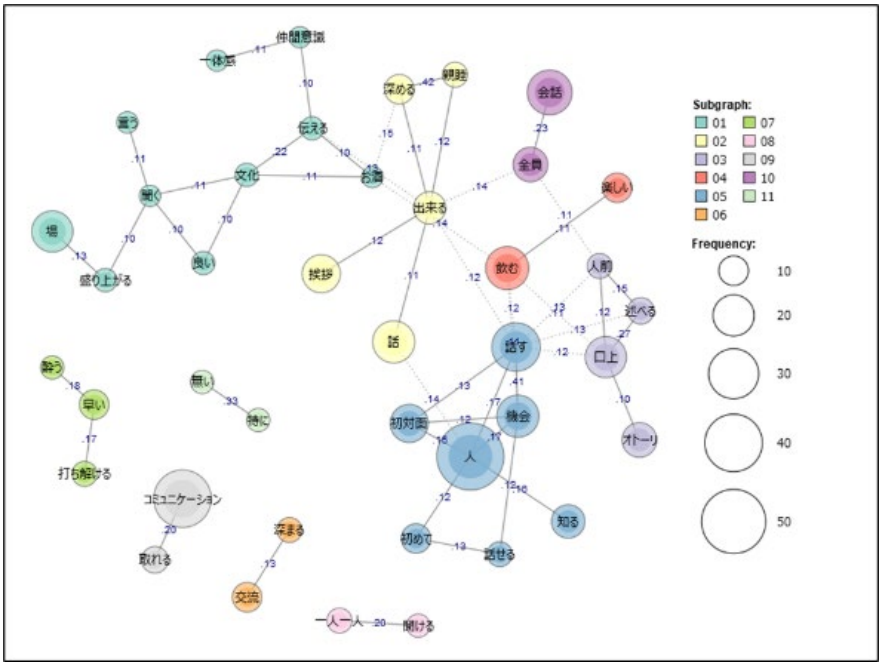


表 13　「オトーリの良いところ」のカテゴリ表

カテゴリ名称	コード数	共起した語	代表的記述（抜粋）
初対面でも話して仲良くなれる	214	人、話す、初対面、機会、仲良く、話せる、一人一人、飲み会、聞ける	初対面の方でも気軽に話せる機会が増える 知らない人でも、一人一人と話す機会ができる事 色んな人と打ち解けて話しが出来る
人前で挨拶をする経験がつく	56	挨拶、述べる、人前	人前で考えて話す経験になる 口上がうまくなる、人前で喋る度胸がつく
全員と会話ができる	50	全員、会話、出来る	全員と会話する機会が増える 出席者全員と会話(名前交換）が出来る
コミュニケーションが取れる	48	コミュニケーション、取れる	オトーリを通してその場にいる人と平等にコミュニケーションをとることができる
交流が深まる	44	交流、深まる、酒、飲む	知らない人や苦手な人とも交流ができる。 皆で同じようにお酒を飲んで会話を楽しみ絆を深めることができる
宮古の風習を伝え、共有し仲間意識が芽生える	31	風習、伝える、仲間意識、宮古島、一体感	宮古島の特徴ある風習（文化）を伝えることができる 宮古島の風習（伝統）が話せる。仲良くなれ、一体感や仲間意識が芽生える。
場が盛り上がる	31	場、盛り上がる、聞く	場が盛り上がる 他の人の口上を聞いたりするのは楽しく盛り上がった覚えがある
早く酔って打ち解けられる	23	酔う、早い、打ち解ける	打ち解けるのが早い。 みんなで、同じように酔って語り合う
特にない	12	特に、無い	特に無い

次に「オトーリの悪いところ」の記述の計量テキスト分析結果を示した。総抽出語数は 2,568 語で、その中で異なり語数は 522 語であった。出現回数が最も多い語は「飲む」で 82 回、続いて「人」が 51 回、「飲み過ぎる」が 49 回と続いた。次に、出現数 5 回以上の単語から共起ネットワーク分析を行い、図 8 に結果を示した。共起ネットワーク分析により、語は 5 つのカテゴリに分類された。共起したカテゴリに名称を付け、コード数、共起した語、含まれる代表的記述を示したカテゴリ表を表 14 に示した。コード数が最も多かったのは「強制的に飲まされる」でコード数は 187 であった。次いで「酒が弱い人には辛い」（コード数 81)、「自分のペースで飲めない」（コード数 54）と続いた。

図 8　「オトーリの悪いところ」の共起ネットワーク図

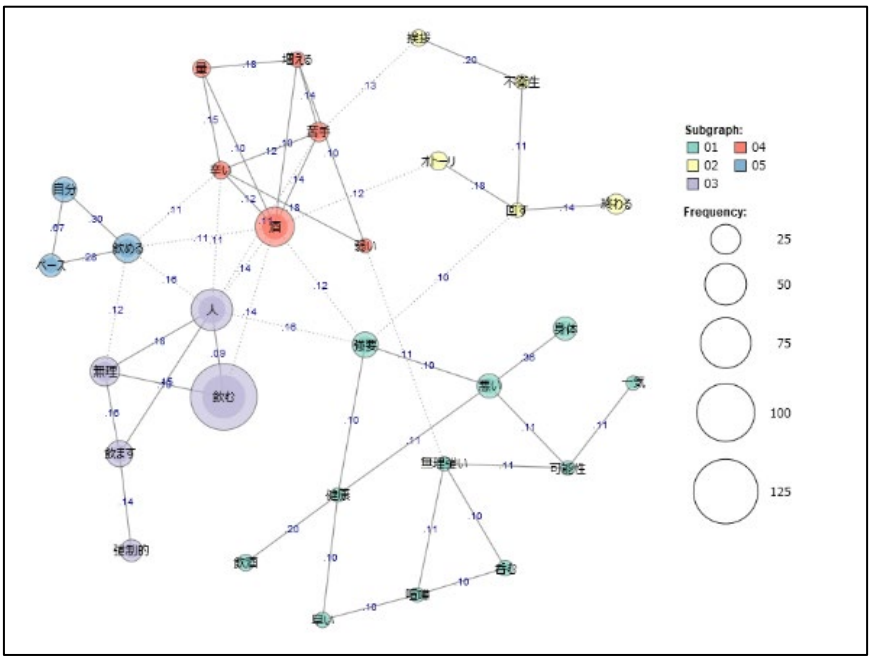


表 14　「オトーリの悪いところ」のカテゴリ表

カテゴリ名称	コード数	共起した語	代表的記述（抜粋）
強制的に飲まされる	187	飲む、人、無理、飲ます、強制的、強要	若い頃だと調子に乗って飲み過ぎる。 オトーリを強制して飲ましすぎる人がいる。 飲めない人にも無理に飲まそうとする人がいる
酒が弱い人には辛い	81	酒、辛い、弱い、苦手、増える、量	お酒が飲めない人には辛い。 飲酒量が増える 飲めない人、弱い人にとってはただただ辛い
自分のペースで飲めない	54	自分、ペース、飲めない	自分のペースで飲めなくなる 自分のペースで飲ませてくれない。結果的に飲み過ぎる。
挨拶の面倒さと不衛生	37	挨拶、不衛生、回す	挨拶が面倒だし不衛生。 同じコップで回し飲むから不衛生。
健康の悪化や路上寝、喧嘩などの社会問題を引き起こす	37	飲酒、健康、早い、可能性、無理強い、一気飲み、喧嘩	一気飲みになるので体に悪そう。 依存症になる可能性がある。 。飲みすぎて路上寝、喧嘩がある。

次に「宮古島出身者にとってのオトーリの意味」の記述の計量テキスト分析を示した。総抽出語数は 2,472 語で、その中で異なり語数は 582 語であった。出現回数が最も多い語は「風習」で 93 回、続いて「人」が 31 回、「飲む」が 26 回と続いた。次に、出現数 5 回以上の単語から共起ネットワーク分析を行い、分析結果を図 9 に示した。共起ネットワーク分析により、語は 5 つのカテゴリに分類された。共起したカテゴリに名称を付け、コード数、共起した語、含まれる代表的記述を示したカテゴリ表を表 15 に示した。コード数が最も多かったのは「宮古島の風習」でコード数は 124 であった。

次いで「人と繋がるためのコミュニケーションツール」（コード数 82）、「酒を飲むことで関係を作る」（コード数 65）と続いた。

図 9　「宮古出身者にとってのオトーリの意味」の共起ネットワーク図

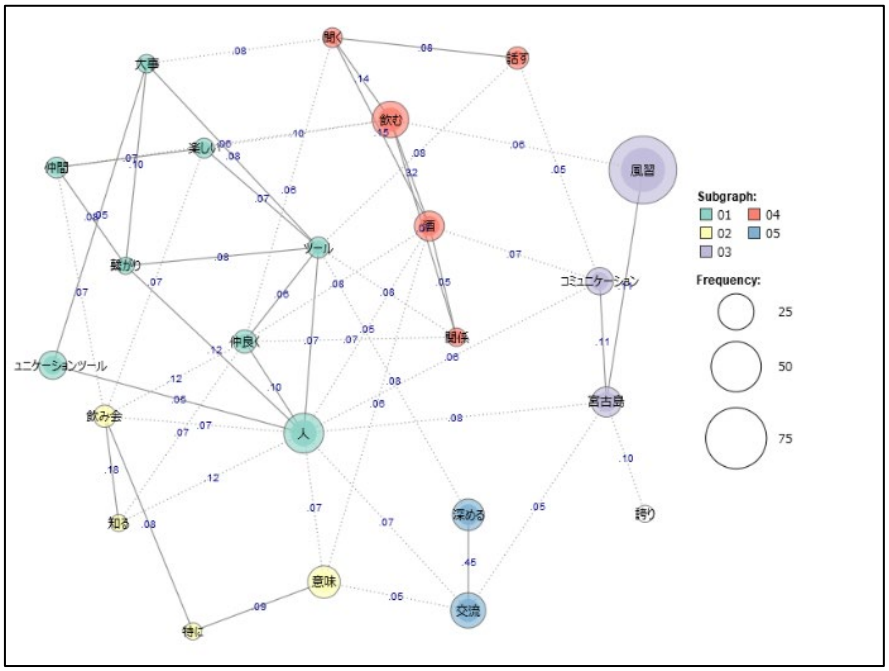


表 15　「宮古出身者にとってのオトーリの意味」のカテゴリ表

カテゴリ名称	コード数	共起した語	代表的記述（抜粋）
宮古島の風習	124	風習、宮古島、コミュニケーション	長年受け継がれてきた宮古の文化という誇り 島に根付く文化としては大きなものだと思う
人と繋がるためのコミュニケーションツール	82	コミュニケーションツール、人、仲良く、繋がり、仲間、楽しい、大事	コミュニケーションの取り方が苦手な宮古島の人にとって酒の力を借りて懇ろになれる手段としての役割を果たしている。 中々話ができない人とも繋がるこができるし
酒を飲むことで関係を作る	65	飲む、酒、関係、聞く、話す	とことん飲んで自分をさらけ出し、人間関係が広まったり、深まったりできる媒体みたいな役割がある 「男は酒の座から知恵が出る」との宮古の諺がある
交流を深める	43	交流、深める	交流を深めたり、自分の思いを人に伝える練習になる 宮古島出身者の交流を深め、強い絆が生まれる
意味はない	39	特に、意味、飲み会、知る	現在に至っては、特に意味は無い 宮古島出身者としての意味はあまり感じない。たまたまそういう飲み方を知っているだけ。

5．考察

5-1　オトーリの出現と時代的変化

オトーリの起源についてはさまざまな説があり、確定できる根拠資料に乏しく明らかにすることができないが、今回の文献やインタビューの成果から時代的変化について示していく。まず、「おとーり-宮古の飲酒法-」[1)]に示す 1368 年頃では、神事の際に神との一体感を共有するために、参加者全員に均等にふるまわれた。次に砂川[8)]の資料から、1768 年頃には、祝いや祈願行事等に用いられ、仲宗根[18)]の資料からは戦前には酒造所が立ち並んだことにより庶民の世界へ移行してきた。インタビュー調査より、沖縄復帰以後の 1975 年頃の好景気と泡盛ブームを背景にオトーリが全員で回すスタイルへと変化し、表 8 に示すように宮古島出身者にとって自然の飲み方として認知され、表 4、5 に示されたように幅広い年代に浸透してきたと考えられる。そして、表 10、表 12 に示されるように、コロナ感染症以降、感染症を増大するとしてオトーリが減ってきたが、表 11 に示されたように、1 つのコップを回すのではなく、各自のコップに親役が注ぐスタイルへと時代的に変化してきたと考えられる。

ただ、オトーリがどのように神事から庶民の世界へ移行してきたのかという点については、根拠となる先行研究等がなかったことから本調査では明らかにできていないため、推測という形に留める。

5-2 世代ごとに推移する宮古出身者のイメージとオトーリ

谷[16)]は沖縄県民の本土移住について、①戦前・戦中期移動世代（1945 年までに移動）、②高度成長期移動世代（1946 年～1971 年に移動）、③日本復帰後の移動世代（1972 年～1989 年に移動）の三つの移動区分に分け、更に野入[20)]は④沖縄ブーム期移動世代（1990 年以降に移動）の移動世代を設け U ターンした者を対象にライフヒストリー調査を行っている。①、②、③では本土で差別や偏見を受け体験がある一方で、④では「沖縄に対する差別や「方言」をめぐる恥の感覚はほとんど経験されていない」と述べている。また、安藤[21)]が沖縄県出身者へ「本土」生活体験について調査した研究では、「差別などの経験は減り、逆に沖縄出身という理由でもてはやされた経験が増えていた」と述べており、出生コーホート（CI《1947-1958》、C2《1959-1969）》、C3《1970-1984》）別では、男性は、差別・いじめに遭ったという人の率はコーホートが若くなるにつれて減り、女性ではもてはやされた経験が、C1 の 33%から C3 の 62%まで倍増していたと述べている。

本稿のインタビュー対象者のオトーリの用い方についても年代が若くなるについても差別や偏見からの宮古島出身者同士の結束や鬱憤晴らしから、宮古島出身者同士の繋がりや仲間を作るためのツールとして変化してきたことが考えられた。また、沖縄本島在住者の宮古島出身者についても同様に、結果で示したインタビューや郷友会誌

[22]において「20年は那覇では「『宮古人には家を貸せない』と断られたこともある」との記述があり、沖縄本島においては宮古島出身者へ差別や偏見があったこと、そして40代､20代のインタビューから宮古島出身者のイメージに変化があったと考えられる。

また、60代の関東や40代の関西のインタビューにあった、同郷の先輩との繋がりについて、これまでは沖縄や本土で先に住んでいる先輩や仲間を頼っていたが、安藤[23]の研究では年代別本土就職の経路として、20代では「情報誌やインターネットを通じて」が最も高くなっており、岸[24]はこれを「カジュアルな移動」と呼んでいる。近年はSNSを通じて同世代に繋がり自分たちのコミュニティを構築したり、航空便の増加により、これまでよりも地元を行き来しやすい環境になった。これら、物理的にも心理的にも本土と宮古島が近くなったことが、若い世代にとって本土に住む同郷者との繋がりがなくなった要因の一つだと考えられる。これまで縦と横関係で構築されていた同郷コミュニティが横関係のコミュニティへと変化したことも予想される。

5-3 オトーリの機能と在り方

結果からオトーリには以下の機能があることが考えられる。まず1点目には「宮古島出身者の結束を高める機能」である。表8、表11、表15から宮古島出身にとってオトーリは「宮古島出身者の風習」という意味付けがあり、表7から宮古島出身者で行う割合が高い、そしてインタビューでも宮古島出身者同士との発言が見られることから、宮古島出身者同士の「結束を高める機能」があると考えられる。次に2点目には「人（出身者以外）と繋がる機能」である。結果から宮古島出身者以外とのオトーリについても示された。オトーリの認知度が高まったことも背景にあると思われるが、宮古島出身者以外ともオトーリをすることにより人間関係を構築していることが考えられた。そして3点目には「対人関係を高める機能」である。例えば、オトーリでは親役は参加者に向けて口上（挨拶）を述べる機会が全員にあり、その中では自分が伝えたいことを話すことは自己主張を高める。また、子役のときには、親役が口上を述べる際他の人と話している場合でも話しを止め、親役の口上を聞かなければならない。これは聞く力を養うことが出来る。更に、親役は口上後に子役に酒を渡す際や子役同士では会話する必要があり、コミュニケーションを高めることができると考えられる。

一方で表14に示されるように強制的に飲まされることや多量飲酒による社会問題など「飲む」ことについての意見が見られることからオトーリを推進しつつも飲酒量を減らすような仕組み作りが今後の在り方として必要である。

6．結論

本研究の結果から①泡盛の歴史的背景からオトーリの方法が変化してきたこと、②沖縄県（または宮古島）のイメージとともに宮古島出身者がオトーリを用いる際の意識が変化していること、③オトーリの機能について宮古島出身者同士の結束、宮古島出身者以外との繋がり、対人関係を高める機能があることが考えられた。一方で、多量飲酒によって社会問題を引き起こす可能性があるため、オトーリの在り方として飲酒量を減らす仕組みが必要であることが考えられた。

また、波名城[25)]の研究では、離島では進学や就職のために多くの若者が島を出て生活するため、離島市町村では自殺対策として若年層を対象に SOS の出し方や自己肯定感を高める対策を実施している。本研究の結果で示された、オトーリの機能は若年層への自殺予防対策としても効果的であると考えられることから、飲酒ではない方法で再考することで今後離島における自殺予防としての活用も期待できる。

本研究の限界として、歴史的背景について神事から庶民へどのように移行してきたのかについては明らかにできていないため推測という点でしかないこと、また、インタビュー及びアンケートに年代の偏りがあることから一般的でないという点である。今後も本研究を進め、明らかにしていきたい。

7．引用文献

1)ぷからすゆうの会、『「おとーり」宮古の飲酒法』、パレット企画、2005。
2)宮古毎日新聞、「観光客にオトーリ紹介」、2013 年 3 月 28 日記事。
3)沖縄県宮古保健所、『宮古地域における飲酒の実態調査』、2013、
4)波名城翔、真栄里仁、伊藤満、下地由美子、「多量飲酒者に対する節酒プログラムの効果-宮古島における取り組み-」、『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』、2019、17 巻 1 号、pp13-20。
5) 下里潤、「宮古島における人口還流の心理的要因と社会的ネットワーク」、『沖縄地理学会』7 号、2006、pp85-105。
6)琉球新報、『新型コロナ/「オトーリ」禁止　宮古島市長訴え』、2020 年 4 月 8 日記事。
7)萩尾俊章、『泡盛の文化誌-沖縄の酒をめぐる歴史と民族-』、ボーダーインク、2004。
8)砂川玄正、「サケを通して見る宮古の人々」、『開館 3 周年記念　第 20 回平良市総合博物館特別企画展』、1992、pp1-30。
9)沖縄県酒造組合、『沖縄県酒造組合 30 年史』、光文堂、2007。
10)萩尾俊章、「宮古・八重山諸島における「酒」の歴史的変遷」、「沖縄県立博物館紀要」第 17 号、1991、pp21-38。
11)平良市史編さん委員会、『平良市史第 3 巻資料 1 前近代』、1981、pp371-372。
12)萩尾俊章、『泡盛をめぐる沖縄の酒文化誌』、ボーダーインク、2022。

13)平良市史編さん委員会、『平良市史第 7 巻資料編 5 民俗・歌謡』、1987、pp225-226。
14)平良市史編さん委員会、『平良市史第 5 巻資料編 3 戦後新聞集成』、1976、pp412。
15) 沖縄タイムス、1972 年 5 月 19 日付記事
16)谷富夫、『過剰都市化社会の移動世代-沖縄生活史研究-』、渓水社、1989。
17)宮古島市史編さん委員会、「飲み屋の拡散、そしてオトーリ」、『宮古島市史第 1 巻通史編』、2012、p496-497。
18)沖縄タイムス、2023 年 1 月 15 日付記事。
19)樋口耕一、「テキスト型データの計量的分析 —2 つのアプローチの峻別と統合—」 、『理論と方法』19（1）、2005、101-115。
20)野入直美、「本土移住と沖縄再適応」、『持続と変容の沖縄社会』、2014、p33-41。
21) 安藤由美、「沖縄出身者の「本土」生活体験 :U ターン者の意識調査から」、『人間科学 ＝ Human Science』 第 31 号、2014、p11-31。
22)在沖伊良部郷友会、「郷友会誌いらぶ：発足 27 年」、1982。
23)安藤由美、「本土居住と沖縄への U ターンの統計的分析」、『那覇市都市圏の過剰都市化に関する社会学的研究』科研費研究成果報告書、2011、 p31-72。
24)岸政彦、『同化と他者化-戦後沖縄の本土有職者たち-』、ナカニシヤ出版。
25)波名城翔、「離島市町村における自殺対策の取り組みの現状と課題-アンケート調査から-」、『九州社会福祉学会』第 19 号、2023、p51-56。

8．英文アブストラクト

Consciousness of Miyako Islander about "OTO-RI /Unique Drinking rules in Miyako island”

HANASHIRO sho（University of the Ryukyus）

In this study, we conducted literature reviews, interviews with Miyako Islanders, and questionnaire surveys to clarify the attitudes of Miyako Islanders toward "Oto-ri".
The survey revealed the following points.(1) The historical background of Awamori has changed the method of “Oto-ri”. (2) The awareness of the use of Oto-ri by Miyako Islanders is changing along with the image of Okinawa Prefecture (or Miyako Island). (3)The key functions of "Oto-ri" are 1) to strengthen unity among Islanders, 2) to connect people who are not from Miyako Island, and 3) to enhance interpersonal relationships. On the other hand, heavy drinking can cause social problems. We think a system to reduce the amount of alcohol in "Oto-ri" is necessary.